

カードラリーがいっぱい

最近、観光振興のキャンペーンとして、カードラリーが大流行です。特に今年が多いです。

稲むらの火の館がチェックポイントになっているものだけで、現在4コースあります。

来年2月28日まで実施されているのは、和歌山県観光情報として「わかやまの休日2nd」は、県内12ヶ所の押印スポットがあります。3ヶ所以上のスタンプで応募ができます。「県内ペア宿泊券」「わかやまの逸品プレミア和歌山(近大キャビア・鯛めし・紀州南高梅ひつまぶし)」が抽選で当たります。

NEXCO 西日本も2月28日までで、「お国じまんカードラリー」は、西日本高速道路の管内24府県で151のスポットです。和歌山県では「稲むらの火の館」を含めて8ヶ所です。パンフレットにある「QRコード」を読み込んで参加登録をしてからスタートです。ごじまんスポットに設置されているQRコードを読み取ってスタンプゲット。応募コースによって必要なスタンプが違いますのでそれぞれ



確認してください。たくさん集める程商品もアップしていきます。

湯浅・広川の「日本遺産巡りスタンプラリー」は11月30日までです。両町の日本遺産構成文化財の内4ヶ所づつと高速道路湯浅御坊道路にあるパーキングエリア「紀州路ありだ」にスタンプ押印所があり、両町2ヶ所を押印して、そのはがきをお送りください。抽選で500名様に「有田みかん・5kg」をプレゼントされます。

また、この「やかただより」が皆様のお手元に届く頃には終了していますが、「濱口梧陵200年記念スタンプラリー」も行われました。「なごみ交流センター」と「稲むらの火の館」で実施されました。全部に、「稲むらの火の館」が入っています。皆様応募してください。



「こども梧陵ガイドプロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！

新型コロナウイルス感染症の影響で、広川町を訪問することは、まだ控えております。そのかわりに、リモートで出来ることを考えて取り組みを続けています。この「やかただより」の発刊、広小学校の全校児童に毎月配布する「梧陵タイムズ」の発刊。そして今回あらたに、広小学校の皆さんに向けて、交流動画を作成しました！



交流動画は、①大学生の自己紹介、②各大学の紹介、③各ゼミの紹介、そして、④こども梧陵ガイドの紹介、4つのコーナーで構成しています。

大学生の自己紹介(①)は、今年から新しく加わったメンバーも含めて、個性あふれる大学生の自己紹介をテンポよく編集してあります。この動画をきっかけに、大学生の顔と名前を憶えてもらえたらうれしいです。大学やゼミの紹介コーナー

(②・③)は、大学生が普段どのように過ごしているのか、キャンパスライフのごく一部を披露しました。わたしたち2つのゼミは、全国各地で防災の取り組みをたくさんおこなっています。広小学校の皆さんには、ぜひ、津波防災以外のことについても、興味を持ってほしいと思っています。こども梧陵ガイドの紹介(④)では、これまで「稲むらの火の館」で4年度にわたって実施してきたプロジェクトについて、経緯や概要をお伝えしています。ぜひ、ご笑覧ください。

新型コロナウイルス、異常気象…。まだ苦難は続きますが、梧陵さんの偉業を見習って、これからも負けずに取り組んでいきましょう！

【濱口梧陵学】

濱口梧陵の行動と津波防災

前和歌山地方気象台長 山田尚幸



<プロフィール>

北海道釧路市出身。

1960年2月生まれ。弘前大学・大学院で地震学を専攻。1984年気象庁採用。主に地震火山業務に従事した。科学技術庁(文部科学省)と国土交通省にそれぞれ出向。東日本大震災の1年後の2012年から仙台管区気象台で地震火山課長、2014年から本庁地震津波防災対策室、地震予知情報課の課長補佐を歴任。2017年3月から和歌山地方気象台長として赴任し県内の気象業務・地震津波業務に従事した。2020年3月定年退職。現在、気象庁地震津波監視課技術専門官として全国の地震活動監視業務に従事。

縁あって3年前に和歌山地方気象台に赴任し和歌山県民として過ごすことができました。この度、在勤時代お世話になった崎山館長から「やかただより」に執筆する機会をいただきました。気象台の視点から濱口梧陵の行動と津波防災について考えてみたいと思います。

縁あって3年前に和歌山地方気象台に赴任し和歌山県民として過ごすことができました。この度、在勤時代お世話になった崎山館長から「やかただより」に執筆する機会をいただきました。気象台の視点から濱口梧陵の行動と津波防災について考えてみたいと思います。

◎ 濱口梧陵手記から読み解く地震時の梧陵の行動

嘉永7年11月4日から5日(旧暦。今の暦では12月23日から24日)にかけて約32時間の時間差で2度の大きな地震(安政東海地震と安政南海地震)が発生しました。この時の梧陵の行動を「濱口梧陵傳」の梧陵の手記から追いました。

- ① 四日四ツ時(午前10時頃)強い揺れ。地震が収まると早速海岸へ行き様子を見る。海水が6尺~7尺(約2m前後)急増急減。大地震の後にしばしば津波が襲ってくることを伝え聞いていた。沿岸部の様子確認後、村人を避難させる。老人、子供、婦人たちは八幡宮境内へ。夜は頑強な男たちに村内や海岸を見張らせ村人に粥を給す。
- ② 五日、花曇りのような空模様。海面異常なし。避難で一夜を明かした村人は帰途につく。井

戸の水位が低くなったとの報告あり。災害が起きるのではないかと恐れた。

- ③ 七ツ時(午後4時頃)再び大きな揺れ。前日の比ではない。瓦は飛び、壁は崩れ…西南方向の空を見ると黒白の怪しげな雲が切れ切れとなった間から金色の光が出ており、まるで異類のものが飛行しているかのよう。南西の方向から聴こえる大砲のような音。
- ④ 周辺の惨状を見つつ懸命に走る。潮流が身体の半分くらいまで押し寄せ、沈んだり浮いたりしながら丘陵に辛うじて漂着。後ろを見ると潮の流れに押し流されるもの、あるいは流木に捕まって命を長らえたものも。八幡宮境内に戻り無事を家族に告げる。
- ⑤ 鳥居際に来た頃には日はすっかり暮れ、松明をつけて男十数人と見回り。稲むらに火をつけ、逃げ遅れた者に安全な場所を示した。この火を頼りにかろうじて生き延びたもの多し。炊き出しのため隣村の僧侶から米穀を借りる。

(『濱口梧陵傳』濱口梧陵手記より抜粋要約)

私が注目したのは、現象の観察とその時々梧陵の素早い行動です。たとえば、最初の地震が収まった後、次に襲ってくる津波を想像し直ちに海岸へ行って波の昇降を観察し、戻ってすぐ次の村人の避難を促しています(①)。また、梧陵が津波の第一波で自ら被災しながらも周辺の様子を見つつ判断・行動し、村人の命を救うための最善策は何かを常に考えている姿が見えてきます(④、⑤)。⑤に記された稲むらの火が逸話の元になっていることはいうまでもありません。

◎ 梧陵の防災行動

地震発生後の梧陵の行動は、現代の防災活動に通じるものがあります。当時は観測システムや情報伝達システムはありません。梧陵は自分の眼で確認するべく危険を冒して現場へ確認に行き、海岸から戻ってすぐ村人を避難誘導しています。今の時代に気象台が大津波警報を約3分以内で発表し、それを受けた市町村が避難指示(緊急)などの避難情報を発令し防災無線や携帯メールで避難を促すのと同じです。また、梧陵は逃げ遅れた人のために松明を使って稲むらに火をつけ避難

路を示しました。今でいうと避難ビルや避難タワーなどへの道標といえます。夜、明かりがない中でとっさの判断をして、稲むらに火をつけて回りました。八幡様境内での炊き出しは、自治体や自主防災組織の役割といえます。このように梧陵の行動は、気象台、市町村、県や国が行う支援(後の堤防建設を含め)に相当します。広村を救おうというという梧陵の強い思いが感じられるのです。もちろん、地震後に海には決して近づいてはいけません。

◎ 防災気象情報の発表体制

気象庁は、地震発生直後、震源に近い地震計で自動的に震源の位置や規模を解析し、大きな揺れが予想される場合には可能な限り早く**緊急地震速報**を発表しています。また、震源が海底で津波が予想される場合には**大津波警報・津波警報**または**津波注意報**を発表します。市町村はこれら警報等の発表を受け**避難指示(緊急)**などの**避難情報**を発令します。これらの情報は防災行政無線、携帯メール、TV、ラジオでも住民に周知されます。

また、南海トラフ地震の想定震源域で巨大地震

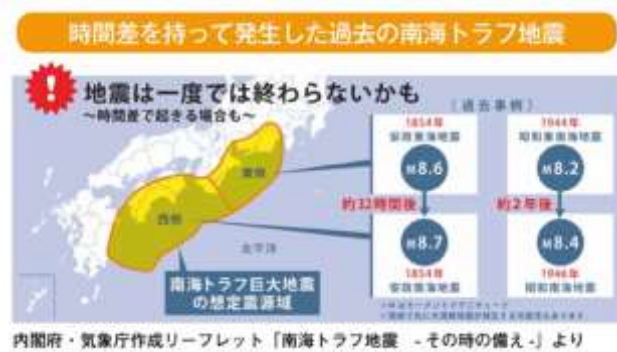


図1 時間差を持って発生した過去の南海トラフ地震と震源域

が発生したり、プレート境界のすべりなどの異常が観測された場合には**南海トラフ地震**に関連する**情報**を発表します。梧陵が最初に体験した南海トラフの東半分が震源となる地震が起きた場合(図1)は、「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」を開催し、その後に発生する可能性の高い西半分が震源となる大きな地震を警戒するための「**南海トラフ地震臨時情報(巨大地震警戒)**」を約2時間後に発表します。この情報が発表され

た場合は地震の発生可能性が相対的に高まったとして、避難困難地域の方や高齢者等は次の地震に備えるため、1週間程度避難することになります。この対応は内閣府が2019年5月に取りまとめた防災対応ガイドラインに示されています。

◎ 東日本大震災の教訓

9年前、東北地方太平洋沖地震の時、気象庁は地震後約3分で大津波警報を発表しましたが、マグニチュード(地震の規模)が過小評価となり、直ちにはその危機感が十分伝わらず、避難の遅れにつながった可能性を指摘されました。これを受け2013年3月から内容を改善し運用しています。マグニチュード8を超えるような



図2 巨大地震時の予想高さの表現

巨大地震が発生した場合は、地震発生から数分程度では地震の規模を精度よく求めることができないため、その海域における最大級の津波を想定して津波警報の第1報を発表します。このとき、非常事態であることを簡潔に伝えるため、予想される津波の高さを「巨大」(大津波警報の場合)、



図3 仙台管区気象台の津波啓発用ポスター(2013年3月)

「高い」(津波警報の場合)(図2)という言葉で発表します。当時作成した津波警報改善の広報用ポスターでは、津波から命を守るための標語を作って周知・啓発をしました(図3)。「強く揺れたらすぐ避難！警報出たらすぐ避難！津波は何度もやってくる！避難は警報解除まで！」という標語は、梧陵の時代にも現代にも通用する内容だ

と思います。

◎ 地域防災支援の強化

また、気象庁はここ数年、市町村における地域防災の支援に力を入れています。平時は**首長訪問**

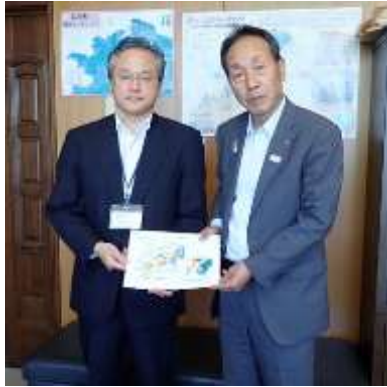


図4 西岡利記広川町長を訪問
(2019年5月7日)

(図 4)などにより日頃から顔の見える関係を作り、緊急時には気象台から市町村への**ホットライン**を用いて気象状況などを直接解説し危機感を伝えます。また、**JETT(気象庁防災対応支援チーム)**として、職員が被災した自治体に出向いて解説を行うこともあります。昨年の台風第19号では、和歌山地方気象台から埼玉県東松山市に職員を派遣しました。

◎ 悟陵に見習うべき防災意識

濱口悟陵の手記を読み、悟陵が丹念な観察・分析から、とっさの判断と行動によって、村人を救った功績に改めて触れることができました。現代に生きる私たちは、悟陵になることはできませんが、自然現象と防災情報について正しく知り、正しく恐れ、いざというときにとっさの判断ができるように見習いたいところです。

この3年間気象台長として和歌山に住んで、いろいろな方と接する中で和歌山県は防災意識が高いと感じました。それは、9年前の東日本大震災を被った東北地方と同じように、過去に大きな地震や津波を経験し、同じく9年前の紀伊半島大水害などの気象災害を経験しているからであろうと思います。

東日本大震災の津波で犠牲になった約1万8千人の方々は、地震直後は皆生きておられました。次の南海トラフの地震で大切な人の命を守るために、一人一人が、いざという時のために何をすべきか常日頃からぜひ考えていただきたいと思います。濱口悟陵のことを思い出して。

(おわり)

夏之夜かたり

(第1回)

広村郷土史(42年)

渋谷家文書

広八幡宮……今より85年前天保初年に広村に(ささらや/吉田屋)半助と云う者、貧せしに大坂に出て米搗をなしけるが、此頃熊野三山に富籤なるものありて、此人広氏神に誓願し若らば、社を修繕せんとせしが、神の効力にて、千両を当りぬ一札の籤代一分(4分の1両)なりき、現今の金にして比較せば2万円に当る也。之にて永代常夜燈を上げると云う誓願なりき。

而るに此の人再び誓願して曰く、今一度千両を当て給はば大般若経、法華経8の巻及び永代3月15日毎年投げ餅せんと」而るに再び千両を得たり。

之の二千両を以て広に来る、当時は郵便なく紙幣なかりしかば此人●●となりて、正金を持ちに広に来り、「ささらや」に來りしが親類なりしが大井(ママ)に其風に驚きて入れず、黒津家に至りて大に優遇を受け、遂に金子を提出す。金50両を仏に献しければ、黒津大に驚きたり其後其誓願通り八幡社に献じたり、今に至る迄宝物存す。田地も7、8反ありたり。



其後、広半(岩崎半助)は貧をなして之れら田を取りもどせり。

偕て岩崎半助は再度千両を得ながら三度目又誓願せしが、彼は曰く満足致候間此度は生命を差上げますことは、千両籤を得させ給へ。と云へりしに3度目にも遂に当りしかば、彼は生命を惜みて生命のかわりに基本財産として田地を献じ、手水鉢を上げたり。以後は八幡社が賑かに盛になりけり。

而るに八幡社の別当と云うものありたり、之れは明王院の東側に薬師院ありて、明王院と共に別当役をなせり神官3名ありき、別当は真言宗の僧が之れを務たりき。神官は竹中大膳(佐々木)、野原某、窪田数馬の3家なりしが維新に至り佐々木一家にのみとなる。(つづく)